

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	ADDS Kids1st 鎌倉（児童発達支援）			
○保護者評価実施期間	2026年 3月 4日		～	2026年 3月 12日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	28家庭	(回答者数)	24家庭
○従業者評価実施期間	2026年 3月 4日		～	2026年 3月 12日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	11人	(回答者数)	10人
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 14日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	個別療育に特化した質の高いプログラムと、個々のニーズに合わせた課題設定を行っています。特に毎回の習得状況に合わせたステップ設定や、定期的なプログラムの見直しなど、お子様の成長スピードに合わせた迅速な個別最適化が行われている点が、保護者の皆さまから高い評価をいただきました。	療育支援ツール「AI-PAC」を活用し、施設での支援内容を共有するとともに、ご家庭での実践の様子を保護者様に記録していただいております。これにより、お子様の状況を双方向で把握・発信し合いながら取り組める環境を提供できています。	各種発達検査を通じて定期的にお子様の成長を捉え、就園や就学といったライフステージの節目にも柔軟に対応できるよう、詳細な実態把握に基づいた支援を展開します。また、保護者様のご希望に応じて幼稚園や保育園等との連携を積極的に行い、お子様の地域生活が実りあるものとなるよう、インクルーシブな保育・教育環境の実現に寄与することを目指します。
2	お子様との深い信頼関係と安心できる場所の提供 「お子様が支援員を慕っている」「通所を心から楽しみにしている」というコメントが複数挙がっています。事業所がお子様にとって、はりきって向かえる場所として機能していることが、大きな安心材料となっています。	通所支援の場に足を運び、支援員と過ごす時間そのものが楽しみとなり、興味・関心の幅が広がっていくような温かい雰囲気づくりを事業所全体で意識しています。また、詳細なアセスメントに基づき、スモールステップでの課題設定を行うことで、お子様が自信を持って取り組める活動から着実なステップアップを図れるよう、全職員が適切な個別療育の実践に向けた研鑽を重ねております。	支援員や児童発達支援管理責任者をはじめ、お子様に関わるすべての職員が肯定的な関わりを日々実践できるよう、風通しの良い支援環境の整備・維持に努めます。職員一人ひとりが倫理綱領および行動指針を遵守し、お子様の最善の利益を実現すべく日々の支援に臨んでまいります。お子様に不安や緊張が見られる際には、決して無理強いをせず、ご本人のペースに寄り添った活動内容へと柔軟に調整いたします。
3	保護者の皆様への伴走型支援 毎週の支援結果のフィードバックや療育情報の共有が、保護者のモチベーション維持や家庭療育の支えになっています。また、相談事に対して迅速かつ的確な対応が行われており、孤独になりがちな育児において安心できる相談先として信頼いただいております。	ペアレントトレーニング「べあすくプログラム」やコンサルテーション等を通じ、家庭療育を体系的に習得する機会を設けています。あわせて、日々の個別の悩みや課題に対しても適切な助言・サポートを迅速に行えるよう、事業所内での情報共有とバックアップの環境を整備しています。	日々のフィードバックを通じて活動の様子をお伝えするとともに、折に触れてご家庭での生活状況やお困りごとを伺い、課題内容の適時更新に活かせるよう努めています。また、必要に応じて児童発達支援管理責任者や管理者、コンサルテーション担当職員による相談の場を設けるなど、多角的なサポート体制を整えております。「べあすくプログラム」終了後も、就学に向けて伴走を続ける支援環境を維持してまいります。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	心理的配慮：「障害者フロア」といった掲示・呼称が、お子様の自覚や自尊心に与える影響への配慮	「障害児通所支援施設」という名称の掲示は、発達の特性や傾向について未告知の状態にあるお子様の自尊心を傷つける可能性があります。自身について正しく理解し、アイデンティティを確立する過程において、配慮が必要なデリケートな問題であると考えられます。	建物の表示内容につきましては、施設の設置者である市と相談しながら検討を進めてまいります。お子様が自身の特性を理解し、自己肯定感を育む大切な時期であることを鑑み、告知状況や心理的な影響に配慮した掲示方法について、市と共同で知恵を絞っております。今後もお子様の健やかな成長を支える施設環境を目指し、市と協力してまいります。
2	支援の均質化：支援員個人の相性に依存することなく、組織としての知識・技量のさらなる底上げをはかっていく	ADDSでは、多様なバックグラウンドを持つ専門職員が、経験や資格を問わず応用行動分析（ABA）に基づいた良質な支援を提供できるよう、体系的な研修を実施しています。初級ABAセラピスト資格を取得した者が指導にあたりますが、配属後も毎日のスーパーバイズ（SV）や事例検討、集団研修を通じ、支援技術の維持・向上に努めています。	職員の専門性向上のため、知識と技術の両面から研修体制を整えています。社会性コミュニケーション支援や、お子様の関心を捉えた効果的な関わり、集団生活の場に即した実践的な課題設定など、より効果的な療育支援をすべての職員が実践できるよう、日々の研鑽と技術の習得に努めてまいります。

3	物理的環境の改善：粗大運動（大きな動き）ができる、より広い個室スペースの確保	粗大運動は、集団療育スペースの広さを活かして実施していません。広い空間での集中が難しい場合には、視覚的な配慮によって環境を整え、のびのびと活動できるよう支援しています。個室で定着した活動を広いスペースへと段階的に移行させることで、習得内容の確実な定着と、実践的な場面での般化を目指しています。	粗大運動や生活スキルなど、お子様一人ひとりの幅広いニーズにお応えできるよう、最適な環境設定を行い、より効果的な支援の実現に努めてまいります。
---	--	--	--